

## 成瀬 正氏

来年の一月で七十五才になる。振り返って見ると、色々な人に世話になった。とりわけ学校での教育の影響は大きかったとつくづく思う。いい先生たちに巡り合えたのは幸せだった。その教えは有形無形の形で今でも私の中に生きている。そんな恩師たちの中で、深いお付き合いはなかったものの、忘れられない先生がいる。高校二年の時の英語の広田先生である。白髪で鼻筋の通った端正な顔立ち、姿勢がシャキッと、古武士の風格のある英国紳士という感じで、パートラウンド・ラッセル卿によく似ていた。

その広田先生の最初の授業で、優等生のTが、さっと手を上げ、「そこはこうゆう言い方ではありませんか」と得意気に質問した。

## 広田先生



広田先生は「無礼者!!そんな訊き方があるか。私は何十年も英語をやっている。『このような言い方もありませんか』と質問するのが礼儀だぞ」と甲高い声で一喝した。教室に緊張が走り、シーンとなった。

それから数週間後、私の事件が起きた。遊び仲間のMとYが広田先生の授業の前に来て、「成瀬、俺たち用事があるので授業さぼるか代返たのむ」と言う。お調子者の私は軽いノリで「いいよ」と返事をしてしまった。すぐに「ヤバイ」と思ったが後の祭りであ

る。三人で空席を埋めるために彼らの机をベランダに出し、私は緊張して広田先生が来るのを待った。出席簿は五十音順で、三人のうち私が最初。「成瀬」、「はい」。数人後に「M」、「はい」と声を変え無時通過。それから「Y」、「はい」。とその瞬間、「いない!!」あの甲高い声が教室中に響き渡った。私の体は凍り付いた。なんとか嵐が通り過ぎてくれと願って体を固くしていたが、「その辺だ」。捜査の網が狭まった。私の周りに代返するような奴はいない。逃げ切れない。私は観念した。「最早これ迄」。恐る恐る「僕です」と手を上げた。「前に来なさい」。私は恐怖におのきながら前に出て行った。広田先生は、ギョロツとした眼で私を見

た。「成瀬か。お前にも浮世の義理があるか?」「えっ?浮世の、、、」。 「はっ、はい。あります」。 「そうか、じゃあお前は欠席。二人は出席だ(なぜ二人とぼれたのかは記憶が定かではない)。私は全身から力が抜けた。席に戻ってほっとしたら、なぜか一種不思議な感動が湧いて来た。数年前、高校のクラス会があった。その時、この話をしたら、Hが「憶えてる、憶えてる。成瀬はあの時、潔かった。俺はずっと尊敬していた」。違う違うよ。しらばつくれようと思ったけど追いつめられて自首したんだ。「いや!!お前は潔かった」。五十年以上もそう思い込んでるHの誤解を解くのは無理だと思った。それで私はHにとって潔い男のままでいる事にした。